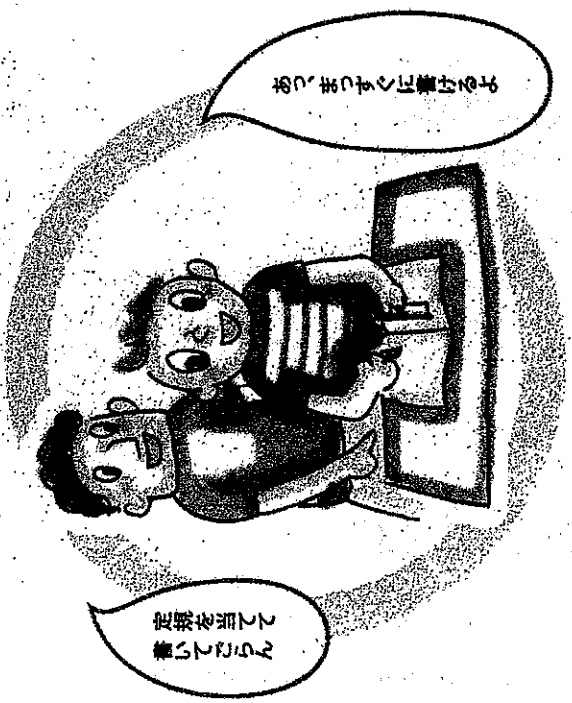
那覇市立若狭小学校　　特別支援教育通信（教職員用）

特別支援だより　No.14

令和3年7月19日（月）　　特別支援教育コーディネーター　松田敦子

本人に合った教え方が必要な子

『普通』という枠を外してみると、本人に合った教え方が必要な子かもしれません。「もっと丁寧にきれいに書きなさい」と叱るよりも、どうしたら丁寧に書くことができるか教え方を工夫することが大切です。



親の気持ち

具体的にどうすればいいか教えてあげればできるんだ

どうしたらいいかおしえてくれたからぼくにもできたようれしいな

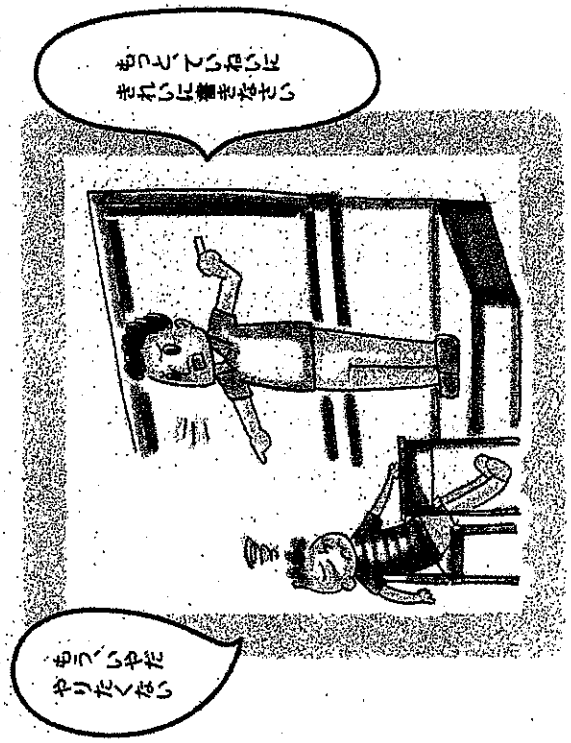
本人の気持ち

POINT! できていない行動を叱るよりも「どうしたらできるかな」というふうに、やり方をいっしょに考えてあげることが大切です。本人が「これなら、できる」という、やる気のスイッチが入るような取組みが必要ですね。

漢字や計算が苦手な子

発達が気になったら⑩

『普通』という枠で比較してしまうと、やる気がないうえに怠けている子と厳しく評価されることが多くなります。



親の気持ち

何回教えてもできないからイライラするのよ

ぼくだってがんばっているのに、おこられるから、もうやりたくない

本人の気持ち

POINT! やる気がないうえに怠けているように見える子は、いつもがんばっているのに叱られてばかりいるので自信を失くしている子なのです。そのため、できそうな課題でも「どうせ、できないと思い込み、無気力になっているのかもしれません。

Q5 他の児童とは別メニューで学習した方がよいようですが…

自閉症児の中には、授業中みんなと同じ内容の学習を行うことが難しい子どもがいます。

自閉症の特性から考えてみましょう

- 学習内容が、知的レベルや言語の発達段階に合っていないことが考えられます。
- 教師が全体に出した指示は自分にも向けられているということ分からなかったり、指示の意味を理解できないために、集団での指導が難しい場合もあります。
- 人と意見交換することや話の文脈をつかむことに困難があるため、テーマについて話し合い、意見をやりとりして結論を導き出したり、教師の問題提起に児童が答えることで進行する授業の形態についていけない、または、そのような進行がわずらわしく感じてしまう子どももいます。図鑑や本から知識を得たり、ワークやドリルを使って学習する方が得意なことも，よくあります。

支援のヒント1 自閉症児への指導例

小学校4年生の知的障害を伴う自閉症の男児。一日の大半を電車の絵を描いて過ごしています。教科の学習では別メニューを準備しなければなりません。このような場合、支援の方法としては以下のようなことが考えられます。

① 全体学習の中で、部分的に参加が可能な箇所は一緒に学習する。教師が諦めてほうっておくことはしないよう心がける。

② 科目によっては、作業内容を発達段階に合わせた課題に置き換えることができる。例えば、お絵かきの時間には「ぬり絵」を、作文の代わりに文章の写し取りを指示するなど、作業として一人で行える学習課題を用意する。その際、保護者と相談してそのような対応をすることの了解をもらっておくことは必要。

③ 発達段階に応じた、自力でできるプリントを個別に作成する。学習に集中できる時間が短い子どもの場合は、終わったら好きな絵を描くことを認めるといった配慮をする。また、特殊学級の先生や通級指導教室の先生に相談し、利用できそうなプリントをもらうなど連携していくことは重要。

④ みんなと違う課題を行うことを、本人を含めたクラス全体が理解し納得する状況を作っていくことも必要。

⑤ 決められた学習内容や方法にこだわらず、好きな電車を利用した学習（例えば、漢字学習に駅名を使うなど）へと広げていく方法も考えられる。

支援のヒント2 高機能自閉症・アスペルガー症候群の児童への指導例

小学校6年生のアスペルガー症候群の男児。興味のあることなら、図鑑や本から沢山の知識を吸収することができます。しかし、教師の話を聞いて学習内容を理解したり、集団で行う学習では困難を生じる場合があります。このような場合、支援の方法として以下のようなことが考えられます。

⑥ 教師の方を向かない、指示に従わないといった授業態度をみせるときでも、聞いていないように見えて情報として取り込んでいる可能性がある。このような場合は、一般的な学習スタイルにあまりこだわらずに対応したほうがよい。

⑦ 教師の話を聞いたり授業に参加することはできなくても、図鑑や本を使って一人で学習することが得意な子どももいる。このような場合は、本人と話し合って、別課題を行うことを許すようにする。（資料調べ係にする、授業に関連する本の持ち込みを許可するといった方法が考えられる。「こだわり」が強く、授業内容と全く異なる課題をしたがる場合には、授業に関連する課題が終わった後に許可するようにする。このような対応を行うことを保護者と相談する。）

⑧ 教科間の偏りが大きく、ついていける授業とついていけない授業の差が激しい場合は、本人の努力可能な範囲で、計算や漢字などドリル的にこなせる課題を用意する。時間割も、「午前中、給食前までにやり終える」といった大枠を設定するケースも想定される。このような対応を行うことを保護者と相談する。

⑨ クラス全体が、別課題で学習を進めていることを認め、本人なりに努力していることが周囲にわかるような手だてを講じる。周囲に理解され、認められていると感じることで自信がつき、クラスの一員であるという安心感が持てるようになる。